

令和2年度 初等中等教育における観光教育の推進に関する協議会

分科会（小中学校） 第1回 議事録

日時	令和2年11月24日（火）16:00～18:00
場所	三菱UFJリサーチ&コンサルティング会議室（Zoom会議併用）
委員	内川 健 成蹊小学校 教諭 河合 豊明 品川女子学院 教諭 宍戸 学 日本大学 国際関係学部 国際総合政策学科 教授【統括座長】 【リモート参加】 清水 英俊 宮城県牡鹿郡女川町 教育委員会【リモート参加】 寺本 潔 玉川大学 教育学部 教育学科 教授【座長】 手塚 美和 静岡県静岡市立清水有度第二小学校 教諭【リモート参加】 (氏名五十音順・敬称略)

1. 開会・挨拶

○事務局・MURC 平川

定刻になりましたので、令和2年度 第1回 初等中等教育における観光教育の推進に関する協議会小中学校第1回分科会を開催いたします。

事前送付させていただきました、次第に沿って進めさせていただきます。次第3.参加者自己紹介以降の議論の部分については、進行を座長の寺本先生に代わっていただきます

開会に先立ちまして、参事官の刀根様よりご挨拶申し上げます。

○観光庁・刀根

本日はお集まりいただきありがとうございます。本来であれば我々の部室の参事官や総括補佐が出席する予定でしたが、Go To キャンペーン等に係る業務のため私から挨拶させていただきます。

Go To トラベル事業を機に、これまで観光産業が狭い意味で位置づけられていましたが、小売業、運輸業、金融業や不動産業といった観光の周りの産業にとって、観光に対するサービスが必須になってきたという意識変革がございました。今回検討する観光教育においても、観光産業に就職する子どもだけでなく、将来様々な業界に就職する子どもにとっても学びとなるようなものを作っていきたいと思っています。

(資料3を説明。)

2. 趣旨説明

○事務局・MURC 平川

(資料4を説明。)

3. 参加者自己紹介（観光教育に対する思い・課題感）

○成蹊小学校・内川委員

成蹊小学校に来て10年程度が経ちます。それまでは特別支援教育や長野県で教員をしていました。

中部電力の補助金研究費を受けながら観光シンポジウムや日本地理教育学会での発表や観光教育推進について検討してきました。

個人的には学生時代にバックパッカーとして外国を旅した経験がありまして、旅をすることで得られる人生観や力といった見えない力が身についたと感じています。今まではそれらを言葉にできていなかったため、今後言葉として伝える努力が必要と感じています。しかし、どの言葉が教育の中で皆に理解されるかを考える必要があると思っています。

成蹊学園としてESD教育に取り組む中でSDGsや社会科教育との関わりについて考えてきました。SDGsは一部の学校やユネスコスクールだけが実施することではないと思いますが、観光教育はカリキュラムベースではなくコンピテンシーベースでどういった力が身に付けられるのかという視点で議論していくものですから、観光とESDには高い親和性があると考えています。今後も、誰が観光者や観光に携わる者の教育をするのか、どの段階でどのような教育が必要だろうかを検討する中で、形になる教育や必要な言葉が決まっていけばよいと思っています。

教育実践としては地図教育に取り組んでおり、最近ではその教育活動の成果として、今年度のユネスコスクール全国大会 ESD 大賞で審査員特別賞を頂くことになりました。地図は社会科の中でとても大事なもののなので、今後は、観光・観光地図とも絡めて取り組みができないかを探っているところです。

○玉川大学・寺本委員

私たちが見逃しがちな学習者が外に旅に行くこと（旅行力）や視野を広げていくといった、内発的な力も観光教育で養っていききたいというご指摘だったと思います。

○品川女子学院・河合委員

小中学校の分科会に参加していますが、本校（品川女子学院）は中高一貫校であり、今年は高校1年生の担任をしています。授業は高校2、3年生の地理の授業を担当しています。

正規の地理の授業で、地域の課題解決として観光教育を行っています。自分の住んでいる地域と他地域を比較する中で観光が取り上げられると思っています。

自身は高校1年時に語学学習のためニュージーランドへ3週間ホームステイをした経験があります。その際「あなたの故郷はどこなの？」「どんな良いところがあるの？」といった質問を多く聞かれ、日本のことを全然知らなかったことに気づき、日本をもっと知りたいと思い、帰国後に青春18きっぷで日本一周をした経験があります。自分の住む地域が他地域からはどう見えるかなど、客観的に地域を見ることについて、観光を通じて行うことはとても面白いことと感じています。

内閣府の地方創生に関してRESAS（地域経済分析システム）データ活用教育の有識者会議に入っていた経緯を活かし、昨年度から観光教育や地域課題の解決学習として実施する取り組みも行っていきます。当校は品川駅前であり、生徒は都心に住んでいる生徒が多いのですが、住んでいる地域として都心のこと

を調べて提言しても地方創生に関する地域課題の解決にはならないため、祖父母の住む地域や旅行先の地域と自分の住む地域を比較してどのような課題があるかを考えています。その中では地方産業の話も出てきます。生徒が行った探究型学習として、RESAS を使った地方創生 政策アイデアコンテストにて中部地区で 1 位を取ることができました。授業では皆が同じ地域を調べるのではなく、共通した 1 つの見方を元に様々な地域を調べていくという授業に取り組んできます。

○玉川大学・寺本委員

前総理（安倍首相）が言っていた「俯瞰する力」が身に付く学習を行っておられると感じました。

○宮城県牡鹿郡女川町 教育委員会・高清水委員

現在は女川町教育委員会に在籍していますが、2 年前まで女川町の小学校で教員をしていました。専門は体育であり、小中を通して子供たちと関わってきました。

震災以降、女川町では漁業だけではなく、商業施設が立ち並ぶ町に変わってきております。徳島商業の鈴鹿先生と連携しながら、女川町で商売に関する勉強を行ってきました。その中で自分たちの住んでいる場所の観光に関する施設について、災害の遺恨も含めて調査しながら授業するところもありました。学校では様々な授業や行事が既にあるため、学校教育の中ではなく課外活動として、女川商売塾という名称で商売体験に取り組んできました。その中で学校現場だけでは育めないような学び、気づけなかった子どもの良さに気付くといった体験をすることができました。

地方で観光教育に関する実践を行ってきた経験から、地方の現場の意見としてお話させていただければと思って参加しております。自身の観光教育の成果と合わせ、皆様から色々聞きながら地方でも実施できたらと思っています。

○玉川大学・寺本委員

専門が体育ということで、スポーツを通じた交流（スポーツツーリズム）など体育の中で観光を意識した部分が生まれるかもしれないと考えています。また三陸は防災の学びとしての観光の側面もあります。人が移動することで観光の現象が生まれるため、広い意味で考えると、色々な教科に関連してくるものと考えています。

○静岡県静岡市立清水有度第二小学校・手塚委員

TOSS という研究団体で学んでいます。今回は、TOSS での観光教育の取組みも踏まえて参加できればと思っています。2007 年に観光立国推進基本法ができたときに TOSS では観光立国の研究を始めました。日本全国の仲間とともに 1810 自治体の観光テキストを作成し、自身も自分の町のテキストを作りました。この際、何を観光で子供たちに学ばせるのかという理念として、地域の良さを知って、地域を愛する子供を育てること、地域の光を見ることが観光立国教育であるとし、すべての地域に良いところがあるとして全地域のテキストを作りました。観光施設がないという地域においても、アランフォーバスの観光の作り方を参考に、どんなものでも観光として作っていこうという形で実施していました。浜松は産業観光をテーマにテキストを作りましたが、テキストだけでなく授業も作っていきました。

テキスト作りを通し観光立国教育は面白いなと思いつつも、学校の中に観光はなかなか入れず、社会の

授業で実施することも難しいと感じていました。そこで地域で観光立国教育を広げたいと思い静岡県では「子ども観光大使」を実施することとなりました。全地域のテキストを作った際に観光立国教育全国大会があり 800 人の先生方に来訪いただき静岡県で開催しました。その実績から県の協力も得て、2011 年から県と当団体（静岡の NPO 法人子ども未来）共催で「子ども観光大使」事業を始めました。

具体的には、地域の良いところを学ぶ講座を年 12～20 回程度開催しています。子ども観光大使になるためには、3つの講座に参加すること、検定問題に合格すること、はがきなどで良さを発信することが必要であり、全てクリアすると静岡県知事から子ども観光大使として認定をしてもらえます。その取り組みを始めたところ、全国の先生方から評判となり、各地で子ども観光大使の取り組みが実施されるようになりました。その後、全国大会を実施することになり、今年は第 6 回目となります。諸事情により今回が最終回となりましたが、コロナの影響もありオンライン開催となりました。オンラインで自宅から参加してもらいましたが、非常に盛り上がり、感動したという声を多くいただきました。

このような経験から、ハイブリットやオンラインで観光について交流することは非常に意義があることと思っています。

○日本大学・宍戸委員

協議会の委員を拝命しており、かつ、本分科会における高校専門科の座長と、分科会全体の統括座長を拝命しています。

観光学が専門であり、高等学校での教師経験があります。2000 年頃から商業教育を中心とした観光教育研究に取り組んでいます。新学習指導要領において、2022 年から観光ビジネスの科目が入ることもあり、商業科や専門学科での取り組みは少しずつ形になってきています。しかし、以前は限られた学校だけでの取り組みであったため、先生方も苦労されたと思います。

観光教育はビジネスや専門教育の認識が強いですが、それだとなかなか広がらないため小中学校レベルからの取り組みが必要と感じています。総合学習の導入後、2006 年頃から総合学習のカリキュラム開発をする中で、小中学校では先生方が工夫する中で題材として観光を取り上げ教育している印象を持ちました。宮崎県で観光副読本などを作ったのが地域の副読本のはじまりと思いますが、沖縄などへ調査に行ったこともあり、それらと関係して小中学校の取り組みにも関心を持っていました。

高校は普通教育の場合、進学や大学受験が中心となり、総合学習にはあまり熱心ではない印象があります。商業高校などにおいては、新たな科目ができることによる変化は期待していますが、従来の教育の枠組みを超えて新しいことにチャレンジすることはあまりないのではないかという認識を持っています。

普通科の分科会では、普通高校では社会科の先生が中心となって観光教育に関わってきた印象でしたが、現場の先生方からは、生徒たちの成長を考え地域を素材に教育をしたいという声がありました。一方私立高校では、専門科目として観光の学習カリキュラムを学校設定科目とし、大学の観光学部につながる教育として高校 3 年生の選択科目としているなど、学校設定科目や社会科教育の中で行う事例が多いと思います。また本日の話でも出たような学外の枠組みを活用するものもありました。普通科教育は、専門教育と異なり小中の延長線上から発展させていく取り組みであると思われます。

今まで観光は産業や日本教育で美德とされる働くことや、いかに稼ぐか、成長していくかという価値観の中で教えられてきたが、コロナもあり今後は国語における文学や芸術が担ってきたような、いかに豊かに生きていくか、生活にゆとりを持っていくかなど、今までにない哲学的な価値観を表明することも

大事ではないかという意見が出ていました。

理科の先生の事例として、理科教育とは全く異なる部分（修学旅行など）で子どもたちの成長という観点で学校教育の中での観光教育活動につなげていたケースもありました。教科との関係性と教育との関係性それぞれの面があるという認識を持ちました。

4. 意見交換

①観光教育で育つ「資質・能力」（観光の力）について

○玉川大学・寺本委員

過年度までの検討結果を元にとすると、大きく欠けているテーマや要素として、観光教育が教育界で認められるためには人間形成の視点を明確にしないといけません。そうでなければ教師は納得しません。観光を題材にした学び、もしくは観光を通じた学びでどのような徳目（人間性や態度）を得られるかが重要です。初等中等教育では結局、道徳的な徳目に帰着させないと定着しないという側面がある。人間形成にどう役立つのかを明確にしないと、産業界で観光が大事と言っているという認識だけで終わってしまいます。

巻末資料の中で「観光と無関係のビジネス」とあるが、こちらは言わなくてもよいのではないかと思います。人が国内外で動けば何でも観光現象となり、警察官や医師などどのような立場でも関係することはあると言えます。観光と無関係となると軽視される懸念もあると思っています。

これまではインバウンドによって地域の観光資源を見直す、活かすなど、「稼ぐ」という商業ベースの観点が強かったが、未知の場所に出かけていくという力を養わなければ、日本は観光先進国にならないのではないのでしょうか。イギリスやフランスの教科書には外国に旅をするという内容が教科書にあるのに対し、日本は掲載がありません。旅行は遊びだから教育ではないと捉えられている印象があります。この点を払拭していかなければいけません。観光街づくり教育は地域資源を見直す、誇りを持つ、良さをクローズアップするということだが、その子供たちが外国に出かけていくという視点での学習はなく、この部分も守備範囲に入るのではないのでしょうか。

東京のような大都市と過疎・少子高齢化で悩む地方は観光が地域活性化の唯一の起爆剤だと思います。そのためどのように地域人材を育てるか、地域間で連携して盛り上げるにはどうすればよいかを考えられる子供を誰が育成するのかという点にクローズアップすべきと思っています。地方の現実をふまえた観光教育を議論しないと、何も言わずとも人が来る観光地（北海道、東京、京都、沖縄など）の話をしていても広がりません。観光教育はこれからの日本の地域社会を救うための一つの教育であり、教育界が無関心ではいけないと思いますので、そのような性質も持たせたいと考えております。

子どもたちが外国に出ていくことに関する教育がほとんどありませんが、それに対してどのようにすればよいと思われませんか。

○成蹊小学校・内川委員

世の中のどこに何があるかを学ぶ機会が少なくなっています。良し悪しは別として、議論するためにはある程度の知識が必要であり、知識がなければ旅行に出かけたい気持ちにならないと思います。まずはその機会をどう作るかが課題だと感じます。学びの形態としてアクティブラーニングが言われている中、

ただ覚えるだけの学習は避けたいところではありますが、まずは知識を持った上で議論できる土壌を子ども達に作り、そのための教材を作っていくことも重要だと思っています。

そういう意味を込めて、私は以前、4年生の社会科の授業で、都道府県調べの学習の際に、東京都の名物になる駅弁を作ってみようという授業を行い、児童は都内の名物を集めて駅弁を構想する実践を行いました。調べながら自然と知識が身に付き、そしてみんなで意見交換をしながら一つのものを作り上げる、あるいは各々が調べた結果をまとめる、このような探究的な取り組みができるとういのではないのでしょうか。

○静岡県静岡市立清水有度第二小学校・手塚委員

行きたいなと思うような、地域の素材を活かした観光を考えるという創造する力も資質能力の一つだと思います。観光庁から出ている観光地域づくり人材育成のガイドラインによると、リーダーに必要な能力として、企画戦略・分析計画力・組織づくり・PR・商品化・事業化がありました。当該内容を小学校に当てはめると、企画戦略は観光における基本知識を学ぶことや地域資源を調査し、それをどのように創造するかを考えることであり、地域の人とのディベート、次に県外の人とディベートし仲良くなることで県外に行きたい気持ちも強まるのではないのでしょうか。最初から県外を考えると小学校教育においては飛躍しすぎる印象もありますので、まずは地域から発信していくことも1つの方法ではないでしょうか。

○玉川大学・寺本委員

観光街づくり大会にはオブザーバーとして二度参加したことがあります。その際、小学生はふるさと大好きっ子が多く、「隣の市町にはたくさん観光客が来ているのに、こんなに素晴らしい自分のふるさとはなぜ来ないのだろう」というクリティカルシンキングな学習が少ない印象を持ちました。

○静岡県静岡市立清水有度第二小学校・手塚委員

香川の先生がシャッター通りを題材とした授業を実施していました。シャッター通りの問題を考え、盛り上げようとしていたが、大変な労力が必要なようで、通常の授業で先生が担当するのは難しいと感じました。もちろんクリティカルシンキングで考えることも大切ですが、実際の観光、集客という部分を突き詰めると創造が難しくなると感じています。

○玉川大学・寺本委員

高学年の場合は、観光を軸に自治体間比較などを通し視野を広げるなど、多角的・批判的な視点も含めていくとよいかもしれません。それにより観光を軸とした俯瞰的な視点を持つことができると思います。そういった視点を、カリキュラムに落とし込めるかの検討が必要になってくると思います。

地方の現状の違いに触れさせていただきました。東京や沖縄、北海道などの観光客が多く訪れる地域に対して、人口減少が進んでいる地域において、観光教育でどのような子どもたちの資質を育てていきたいと思われませんか。

○宮城県牡鹿郡女川町 教育委員会・高清水委員

小学校の段階から自分たちの町の観光資源を調べて発信する取り組みを実施しています。小学校低学年から中学校にかけて様々な経験をしながら自分たちの町の発信をしています。昨年度は各店舗に職業を体験し、CM や動画作りを行いました。自分の町の観光資源を知った上で、他の市町村と比較・評価することが重要ではないかと感じます。女川町では小学校 6 年生が修学旅行で福島に出向き、福島の文化遺産を体験・経験します。その中で宮城県と福島県の観光の違いや生活の違いが見えるのではないかと感じていました。震災以降は神戸に修学旅行に行っていました。小学生がいきなり東北をとり越えて関西に行くとなると、子どもたちの印象の中で、どのような学びがあったのかと考えることがありました。楽しかったというだけで終わってよいものかと疑問に感じています。出向いた先で商業・流通、観光資源など、子供が目で見えて体験して感じる事ができたら、次はどの街に行ってみようかと思うかもしれないと感じました。

○玉川大学・寺本委員

修学旅行は観光教育を支える重要な実施体験の時間となるため、是非取り組んでいきたいとおもいます。従来のような特別活動ではなく、現在は教育旅行や産業観光（JR 東海元会長の須田氏が提唱）とも言われています。修学旅行の在り方が変質しつつある中、SDGs と絡めて修学旅行に観光教育の視点を取り入れていくことができると思います。

○品川女子学院・河合委員

今実施しているデータ活用は高校向けのため、小中学校向けに置きなおす必要はあると思います。

中学 1 年では世界地理が社会の授業の 1 番最初にあるが、生徒 1 人 1 人が知らない国に初めて行くと思定した上で 1 週間のツアープランを立てる宿題を夏休みに出しています。その時にほとんどの生徒がインターネットやガイドブックで情報を調べてきます。面白い内容を取り上げている生徒は、インターネットやガイドブック以外の資料を図書館などから持っており、小さい頃から家族旅行で海外を経験している子どもは、どのような情報源をたどって、どのような切り口での視点を入れるべきかを何となく理解しているように見受けられる。現在は予備知識なしに生徒が各々調べてきているが、観光に対し、どのような情報源をどのような切り口で見るかが分かると良いのではないのでしょうか。

東京と宮崎の高校生でオンライン交流する機会があり、宮崎に東京の高校生を連れてきたという前提で、東京の高校生は宮崎のどこに行きたいかを考え、宮崎の高校生は宮崎のどこに連れていきたいかと考えました。結果を見たら両者のギャップが非常に大きかったことが印象的でした。このことから、地域情報に対するファクトチェックをどこかの段階で取り入れることができたら良いかと思っている。

○玉川大学・寺本委員

非常に良いアイデアだと思う。全国の小中学校でもできるのではないかな。

○品川女子学院・河合委員

小中学校で情報の仕入れ方、見方について経験することで、高校におけるデータ分析につながると思います。現在のデータ分析は数学でメインに取り扱われており、地理に応用されているなどしています。高校の新しい学習指導要領に出ている地域分析について、何でも良いからデータ分析しなさいとなってい

ます。観光視点であれば、データ分析の前に行く側と受け入れ側で齟齬が無いようファクトチェックを取り入れることで、偏りのあるデータやガイドブックなどにより作られたデータかを判断する材料となり、データ分析する意味も大きくなると感じます。この視点は社会科だけでなく様々な教科につながるのではないのでしょうか。

○玉川大学・寺本委員

有効な視点が提示されました。現状、旅をする側と受入側のミスマッチが起きています。ホストとゲストの思惑を一致させることで優れた観光商品が生まれ、地域活性につながる視点を得ることができます。ホストとゲストの相互交流機会、広い意味で教育交流機会が必要となってきます。観光教育がふるさと教育と異なる点は、他者の視点があるかないかが大きな違いだと考えています。来訪者の立場で自地域をどう見るのか、旅をする際は現地の人と関わりながら、自分たちがどのように見られているかを類推しながら旅を楽しむなど、観光先進国の国民を標ぼうとして国民形成をしていき、観光大国までいかずとも観光先進国を目指していきたいと思います。そのためには観光先進国の担い手づくりが重要であり、観光教育としてのターゲットの1つになるのではと思います。

○日本大学・宍戸委員

高校普通科の中で、観光を教えるのか、観光で教えるのか、という議論がありました。先生方は子供たちの成長にいかに関わるか、背景を考えていらっしゃると感じました。その学びを、子どもたちが小中学生の段階で分かることなのか、小中学生の間は難しく理解はできなくても、いずれその学びが花開くのかなど、議論のスタンスが違う印象を持ちました。

小中学校では観光で教えるという認識が強いのかなと思います。金融教育、保健教育などでは教えられず、観光教育でないと教えられないことを明示していく必要があると感じました。外のことを知らないと地域のことが分からないという、他者の目線をどこまで小中学生が持てるかは分かりませんが、反対に地域のことを知らないと外のこともわからないという鶏と卵の話になってしまう部分もあります。

小中学校の議論においては、対象とする子どもの年齢が幅広いため、包括すると今わからなくても小中学校で培っていただきたい理論的背景が先生方に刺さるのかと思いました。低学年と高学年で違いはあるとは思いますが、観光教育の実務面より教育理念価値を重視して認めていただくことが重要だと感じました。

②観光教育と「社会の関わり」について

③観光教育の「意義・目的」について

○玉川大学・寺本委員

観光教育とは、実社会との関わりが深い分野です。そのため、実業系の商業科では観光ビジネス科という新科目が設定されることとなりました。一方で、地域社会に存在する初等中等の児童生徒たちも社会の中で育まれて生活をしています。実社会との関わりや意義目的に繋がる学びへと磨き上げ、観光教育を成熟させる必要があると感じます。そうしなければ、他の「〇〇教育」と同様に軽視されかねません。国民各層に、観光教育が必要な学びなのだとして理解してもらい、1つの「〇〇教育」としてしぼんでしまうことを避けたいと思います。後半の②③ともあわせて、何か意見あれば。

○宮城県牡鹿郡女川町 教育委員会・高清水委員

他県との交流という視点で良い事例だと思うのが、2年前にグループで行った女川町の資源を生かしたプランニングのプレゼンです。当時連携をしていた徳島商業高校の生徒に、小学生がプレゼンをするという体験は、小学生同士で話をするよりも質の高い質問が高校生から投げかけられるため、小学生にとって非常に良い刺激になったと感じています。プレゼンの相手が高校生で、真剣に受け止めてくれるため、より深い内容まで調べ、自分が調べたものをしっかりと表現するという成長に繋がっていると感じました。このように、小学生の取り組みを真剣に受け止めてもらえる土台があると良いと思います。

しかしながら、この取り組みのハードルは高いとも感じています。この授業を通した子どもの変容などを見て、ここ数年で学校にも受け入れられるようになってきました。異なる相手に発表をするという方法で、社会との繋がり方が様々にあってよいかと、経験の中で感じました。

○静岡県静岡市立清水有度第二小学校・手塚委員

観光を取り上げることによって、様々なツール（はがき、マップ、双六、CM 作成など）を使って表現を豊かにすることができます。観光に限らずできてしまうかもしれないが、観光であれば、どの資質も観光教育にとりいれられるため、創造性の育成は観光教育でしかできないと思っています。

地域にどんな観光資源があるのかを考える授業をしたことがあります。いつも遊んでいる公園を観光地にすることを提案した子がいました。夜空が綺麗に見える公園だから「星空観光」。その公園で、口に入れてすぐに溶けちゃうキャラメルを売ると言っていました。このような現実にはないものを作っていくという創造力を育てるには、観光教育が最もフレキシブルで適しているのではないのでしょうか。

○玉川大学・寺本委員

星空観光・夜空観光が今はブレイクしており、10年前では夜空が観光資源になるとはだれも思ってもみなかったのもので、そういった提案のできる企画系人材をいかに育てるかも、大きな意義となると思います。

「地誌」という言葉があり、これは地域について総合的にまる掴みする地理学の方法論です。昭和30年代までは各地に普及していましたが、今はその考え方が薄れてしまっています。小学生ではほとんど扱われず、中学生のみ短い時間で世界や日本の諸地域学習を取り扱っています。イギリスやフランスでは、地誌の教育が小学生からされているのに対し、日本では地誌が非常に弱いと言えます。この地誌は、観光をフィルターにすると、観光地誌と名づけることもでき、主力教材の1つになりえると感じています。

○観光庁・刀根

観光庁の議論としては、これまで初等中等教育の観光教育として取り組んでいましたが、来年度の予算を獲得する際に、「初等中等教育」というと、文科省との兼ね合いがあるため、「未来の観光人材育成事業」と名前を変えて予算要求しているところです。

子どもへの観光の教育だけではなく、一般の住民の方の理解も含めて押し出していこうという議論をしています。その中で、観光を教えるか、観光で教えるかという観点については、観光で社会を充実させ

る、観光で創造的学習の時間を充実させるという視点が多かったのですが、観光を教えることも今年度から取り組む必要があると考えています。

○玉川大学・寺本委員

観光を人ごととしてとらえている人が非常に多いと感じますが、それではおそらく日本は成長できないのではないかと思います。広い意味での観光（菅政権で推進されている自由貿易なども含む）を進めていかないと、日本の価値が向上しませんし、雇用が継続できなくなる可能性があります。また、地方で急速に高齢過疎化が進む中、何らかの観光資源を見出し、地方自治体に希望を次世代に見せていくことが観光教育でできると良いと思っています。

教育現場はひっ迫しており、新しいものを追加できない状況かもしれませんが、その課題をいかにクリアしていくかが大切になる。普通教育においては、観光科というような新教科を作れるとは思っていません。人間形成や国際理解に役立つなどの理解を促し、いかにメリットの多い学習場面を提供できるかが重要となると思います。そういった戦略も含めて、どうすると現場に浸透しやすくなると感じられますか。

○成蹊小学校・内川委員

修学旅行などで楽しかったという経験は心に残り、次に生きるような気がしています。学習に直接結びつきにくいので、教育の中で理解されづらいかもしれませんが、行ってみたい、知ってみたいという意欲は貴重で、いかにトータルな学びとしてとらえられるかが重要だと思います。

観光は特定の産業とは違って全国どこの地域でも行われているものです。観光振興に成功している地域もあれば失敗している地域もあるので、どうやったら自分の住む地域の観光がうまくいくかを、他の地域の先行事例を知ることでもできます。それ故に、観光学習は、自分たちの住む地域の学習に留まることではないのではないかと思います。つまり、比較・分析の視点をもたせた学習につながると思います。私は以前、5年生の環境の単元で観光公害を教材化し、京都、白川郷と地元の事例を取り上げ、タイプの違う地域の観光問題をどうやって解決するかを考える実践を行いました。ある地域で考えたことは、他の地域にも応用できる考えにもつながるし、それが子ども達の分析力や考察力につながっていくのだと思います。

また、観光人材という観点からは、小中学校の段階で「もてなす」という側面は学習できている印象があります。それよりも、旅先での態度やマナーを学ぶことも必要ではないかと感じていますが、旅先での態度面を教える機会がないことが問題だと感じています。人を育てる教育という側面も観光学習にはありますので、児童にそういった学びを与える可能性もあります。

観光は、地域だけではなく、人に焦点を当てられるということが大きな意義だと思います。観光を学習することで、3世代間の交流や、地元の人々との交流などの要素があると思います。

今後の教育の中では、SDGsが重要なテーマだと思っています。各学校ではやらなければいけないのに、どうやったらいいかわからないという声も聞きます。そのために観光学習が一つの事例となり得ると思っています。

○品川女子学院・河合委員

普段高校生や中学生を見ている中で、結局のところ観光産業が何かを分かっていると感じます。観光との関りがうすい職業が観光にどう結びついているのかを高校生になってもイメージできないのか、高校生になったら一層イメージしづらくなっているかもしれないと感じます。

自身の高校の生徒の平均通学時間は1時間で、生徒それぞれの地元が違うため、共通認識としての観光地がどこなのかということが大きなテーマになってしまいます。今東京で教えていると、観光地といえば、浅草とディズニーリゾートくらいしか出てこないのです。高校がある品川の品川神社は地域の高齢者にとっては大切でも高校生にとっては全く興味のないものになってしまっています。反対に、広島にある石見神楽は地元の人たちにとっては観光資源ととらえていなくても、よそ者からすると観光資源であるものもあります。地元の間よりも、よそ者の方が観光資源を見つけることができ、言い換えるとよそ者にとって観光資源だと思えるものは観光資源になるのだと思います。地元の人にとっては観光に繋がられない観光資源がたくさんあるため、お互いの通学範囲に行ってみるだけでも観光資源を見つけるきっかけになると思います。同世代の中学生同士小学生同士での地域を超えた学びあいを通して、各地域に共通していて一般化できることと個別化していることの二つのテーマ学習ができるのは、観光だけなのではないでしょうか。一般化することと個別化することは、意外と難しく、重要な視点だと思います。

○玉川大学・寺本委員

あれもこれも良いんだよと牧歌的では観光資源にならず、磨き上げる視点(ブランディング)も重要になります。より深い思考に繋げなければなりません。教材の吟味など、課題は山ほどありますが、観光教育の意義を社会にどう理解してもらおうかが重要となってきます。

○静岡県静岡市立清水有度第二小学校・手塚委員

小学校は今年度の後半から1人1台端末導入されるようになりました。そのため、1人1人が他地域の子どもと交流することができるようになりました。地域内だけではなく、遠方の他地域の子どもとの交流ができるため、先ほど話題になったファクトチェックが出来るようになります。多くの小学校で取り組めば、盛り上がるのではないのでしょうか。私の勤めている小学校では、地域のことを「有度学」と題して学んでいます。他県の児童と観光ファクトチェックをマンツーマンで行うことも試行していきたいところです。全国にあるおよそ2万の小学校でやれたら盛り上がると思います。

○宮城県牡鹿郡女川町 教育委員会・高清水委員

他の先生方が話されたように、現在、既に先生方が取り組んでいる内容と類似したものが多くあると感じました。それらを見直しという形が受け入れやすいかと思っています。

また、現在の観光地として思い浮かぶ場所には、魅力があるから人が集まるので、そうしたところに行って体験することが、楽しかった嬉しかったという感情を生み、今後のステップに繋がると感じました。

今後どう導入していくかについては、今実施している内容の見直しの視点が必要かと感じています。

○玉川大学・寺本委員

相手が本当に行きたいと思っているのかという問いかけを改めてすることにより、初めて他者の視点

に立てるのではないのでしょうか。自己中心的な見方からの脱却により、広い視野を得ることができます。観光教育こそが、楽しさを感じながら、マーケティングを含めた他者の視点に立つことができる機会になると思います。

○日本大学・宍戸委員

小中学生は自分の目線からモノを見ることが多いので、他者の視点というのは重要だと感じました。

楽しいことを教えることは難しいことだと考えています。ゆとり教育というイメージが良くないかもしれませんが、今の子どもたちにとって非常に重要な視点です。高校の社会科の先生方の中では盛り上がる話題ですが、子どもたちが生きづらい今の社会の中で、楽しむことや生活の中でゆとりを持つことが観光教育の1つの知恵だと感じます。

手塚先生が観光はある種なんでもありとおっしゃっていましたが、観光学はそもそも地理学や心理学、経済学によるアプローチがなされ、そもそも対象でしかなく学問ではないと言われていました。逆に言うと、観光はすべてを内包し得るため、身の回りにあるもの引っ張り出して、組み立てることができます。

おもてなしという陳腐化してしまっていますが、観光ではもともとホスピタリティが非常に重要です。評価の中で、人に対して楽しませるといった観点が比較的なかったと気づきました。やはり、他者の目線で思いやりをもつことが原点で、地域の素材に目を向けて、誰かに楽しんでもらうことを、交流を通して体験するためのきっかけとしては、小中学校の時点では観光が適していると思います。人間の心に関わる力を育てることができると思います。

6次産業化を含めて、観光は様々な産業に関わっているため、観光が死んでいくと、その地域も死んでしまうことを学校の先生に知っていただく必要があります。

○玉川大学・寺本委員

観光が死ぬと地域が死ぬという言葉は、身につまされる言葉だと思いました。観光産業の認知がされていない証拠に、教科書に観光産業の記載がありません。そろそろ具体的に観光産業を教え、教科書への記述も必要だと感じます。

次回は、北海道の新保先生にお越しいただき、観光教育に関わる様々な取組みについて説明いただきます。

○日本大学・宍戸委員

良い取組みの持続性や継続性に課題があると考えており、続かない理由を明らかにしていきたいと思っています。教育の素材として、持続する仕組みやアイデアがあれば、今後に向けてご意見を頂きたいです。

5. 事務連絡

○事務局・MURC 小森

未来に向けた建設的な議論をありがとうございました。

次回は12月14日に本日と同様の会議室で実施します。新型コロナウイルス感染症の状況もあり、今後もオンライン参加を推奨させていただきたいと思います。都内近郊の方でオンライン環境が整わず、参集をご希望される場合は、本日と同様の対応とさせていただきます。1月19日の第3回分科会は他の分科会と合同です。

また、本日の議論の内容は、トピックとして他の分科会でもご紹介させていただきます。

○事務局・MURC 平川

次回分科会までに何かご意見がございましたら、ご連絡いただければ幸いです。

以上